

(A)

ワークショップおよび国際委員会等参加報告書

2014年4月18日

報告者	氏名：高倉浩樹
	所属：東北大学東北アジア研究センター

会合名	国際北極科学委員会人間社会作業部会 (IASC SHWG) 会合	
会合目的	2013年度の活動報告と2014年度の活動計画の検討および決定	
主催団体(共催の場合並記)	国際北極科学委員会, 北極科学サミット週間 (ASSW) 2014	
会合年月日	2014年4月5日 ~ 4月5日	
会合場所	会場名称：フィンランド気象研究所(フィンランド大学構内)	国名(都市名)：ヘルシンキ(フィンランド)
出席者(日本人は所属とともに分かる範囲で記載)	Peter Schweiter, Gail Fondahl, Otto Habec, Peter Skold, L. Hacquebord, L. Broz, A. Rautio, L. Heininen, R. Czarny, E. Conde, S. Jaalamson, A. Petrov, P. Jordan など	
会合開催の経緯	2013年度の活動報告と2014年度の活動計画の検討および決定	
主要な議論と決定事項	<ul style="list-style-type: none"> ・新メンバー紹介 今年度から新しい社会人間作業部会の委員が紹介された。従来の委員が交代して場合もあるが、スペイン、ポーランドからは新たに委員が加入した。これらの参加国の委員は国際法・政治学の専門家であった。その他、ゲスト参加者も多く、最大時には40人のほどの参加者だった。APECへの参加を行う目的できたと若手のゲスト参加者もいた。 ・2013年度活動報告 「ロシアと極北人類学」ワークショップがペテルブルグ大学で開催され、ロシア極北の変化についての人類学の今後の可能性について、北極国8カ国と先住民代表1の参加のもとにおこなわれた。「北極人間開発報告II」(AHDR II)は、人間作業部会の主要メンバーで執筆されており、最終版が近日中に完成するとの見通し(申請者は内部査読者として活動参加)。 ・今後の企画 ICAP IIIにおける社会科学の積極的な参加を促すために、2014年5月にカナダで行われる国際極北社会科学会第八回研究大会(ICASS VIII)において説明会が開かれる。また2014年内に「北極の自然資源の開発：過去・現在・未来」がスウェーデン・ウメア市で開催される予定であり、大学院生の参加を歓迎する。8月には第54回ヨーロッパ地域科学学会会議(Congress of the European Regional Science Association)がペテルブルクで開催され、これにも社会人間作業部会メンバーが参加する。 ・関連情報 スウェーデンのPeter Skoldからヨーロッパ北極のガバナンスに関わる研究プロジェクト「New governance for sustainable development in the European Arctic」が紹介され、2014-18年で450万ユーロでロシアを含む五カ国から8つの専門分野に関わる36人の研究者が参加することが報告。またアメリカのNSFの助成で「Network Arctic-FROST」(代表: Andrey Petrov : University of Northern Iowa)という資源と環境に関わる社会科学ネットワーク構築のプロジェクトが始まることが報告。さらにASSW2014開催中にICARP IIIからの助成を受けて行われる「Permafrost indigenous Land use workshop」(高倉が共同主宰者)について事前広報。オランダのフローニンゲン大学北極センターでは考古学と環境科学に関わる学際分野で「文化と北極の気候変動」ワークショップが開催されると報告。 	

(A)

	<ul style="list-style-type: none">・今後の活動に関する提案 健康問題について、北極医学と人類学などの分野の研究を進めることが議論された。それに関して、食に関する人間の安全保障の観点で、政治学や国際関係論が関わる余地があることが検討された。来年のASSW2015において人間社会作業部会も積極的に参加するが確認。・予算 事務局提案の通り予算が決定
本会合の今後と関連会合	ICASS8 では人間社会作業部会の非公式会議が開催される。
会合における報告者の役割、発表内容	ASSW2014 内に開かれる「Permafrost indigeneous Land use workshop」(2014/4/6-7) について共同主宰者として人間社会作業部会実務者会議の参加者に趣旨説明をした。また 2015 年の富山会議への参加を呼びかけた。
報告者ないし日本のコミュニティー・JCAR が留意すべき点、およびアクションを起こすべき事項	今回、特に感じたのは、北極社会科学がロシアとの連携を強めようとしていることだった。特に人類学・地理学分野ではロシアの研究者を巻き込んだ研究プロジェクトが動き出しているという感想をもった。また従来、人間社会作業部会に委員を出していなかったスペインやポーランドからは法学・政治学者が加わったことで、作業部会内での研究の関心や方向性が、広がったことを感じた。日本における法学・政治学・安全保障に関わる分野を、国際北極科学委員会の活動とリンクさせる必要性を感じた。昨年も感じたが気候変動とエネルギー問題にさまざまな人文学・社会科学分野が理系分野として学際的に研究事業を行うための支援をつくる仕組みが必要である。また APEC に人文社会科学分野若手研究者が参加支援をするような仕組みも考える必要がある。
備考 (上記以外の事項)	特になし
添付資料 (○をつける)	<ul style="list-style-type: none">・アジェンダ ○・主な参加者一覧 ○・会合の配布・発表資料 (可能な範囲)・会合主催者作成の報告書 (後日提出可)・その他 ()